| | |
|---|---|
| Title | 宗教寛容とデモクラシー ： ミルトンとウィリアムズ |
| Author(s) | 大木，英夫 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No.5, 1994.3 : 42-66 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2979 |
| Rights | |

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 宗教寛容とデモクラシー——ミルトンとウィリアムズ

大木英夫

## 一　ロージャー・ウィリアムズ再発見の系譜

### (1)イェリネックからウェーバーとトレルチへ

きょうは「宗教寛容」というテーマです。ここでは「トレレーション」と呼ばせて頂きます。このトレレーションということについて、特にミルトンとウィリアムズを中心にお話をさせて頂きたいと思っています。

このトレレーションという言葉を、私はあえて「宗教寛容」と訳しています。これは、日本人は宗教的に寛容だというようなこととは大変意味が違うということをまずはっきりさせておきたいと思います。「宗教寛容」ということ自体、歴史の中から生み出されてきた概念です。日本的な精神、日本的な心理を表す言葉ではなくて、これは特定の歴史的な概念であるということです。そういうふうに考えてみますと、このトレレーションということがどのような仕方で歴史

の中に現れ出てきたかという問題が出てきます。そこで歴史に赴いてまいりますと、どうしても、ここに挙げました二人の名前が現れて来ざるを得ないのであります。まず、ジョン・ミルトンは『失楽園』など、文学面で大変に有名な存在で日本でかなり知られていますが、もう一人重要な存在、それがロージャー・ウィリアムズという人です。

ロージャー・ウィリアムズは、ミルトンとただ単に同時代であるばかりではなくて親しい友人関係にありました。ロージャー・ウィリアムズもジョン・ミルトンもケンブリッジの出身者です。ロージャー・ウィリアムズは一六〇四年に生まれ一六八三年に亡くなりました。かなり長生きをしているわけですが、ケンブリッジに学ぶ際に、一七世紀の法制史に必らず出てくる、有名なコモン・ロウヤーとして今日までその名前を記憶されているエドワード・クックの援助でケンブリッジで学んだ人物です。

私自身の、ロージャー・ウィリアムズ発見の系譜を申しますと、私がこの名前を一番最初に知りましたのは、私の先生でありましたチューリッヒのエミール・ブルンナー先生からです。ブルンナー先生がこの「ロジャー・ウィリアムス」という名前を、日本に来てなされた講演の中で言及されました。神学校を卒業したばかりの若い牧師で、読んでいるのはごく限られた、バルトとかブルンナーとか、そういう神学しか知らなかった私が、初めて聞かせられて「こういう人がいるのだな」と思ったというのが、私の、ロージャー・ウィリアムズとの最初の出会いです。

その後、いろいろな学びを続けている中で、イェリネックという人物が出てきました。来年度はこの研究会で京都大学の初宿正典先生が発表して下さることになっていますが、このイェリネックという人が、ドイツ側でのロージャー・ウィリアムズの発見者の名に値するのではないかと思います。ここにイェリネックの有名な *Die Erklärung der*

*Menschen-und Bürgerrechte* という論文の一節を引用しておきます。初宿先生の訳を拝借します。

「個人のもつ、譲り渡すことのできない、聖霊の神聖な諸権利を法律によって確定せんとする観念は、その淵源からして、政治的なものではなく、宗教的なものである。……その最初の使徒はラ・ファイエットではなく、ロージャー・ウィリアムズである。彼は力強くまた深い宗教的情熱にかられて、信仰の自由に基づく国家を建設せんと荒野に移り住むのであり、今日もなおアメリカ人は深甚なる畏敬の念をもってその名を呼んでいる。（57ページ初宿訳、一部私訳）

これは、ロージャー・ウィリアムズのドイツ側からの最初の発見と言ってもいいのではないかと思っています。少なくともこのイェリネックなしにロージャー・ウィリアムの名前はヨーロッパ大陸において知られるということはなかったのではないかと思います。

ところで、これは観光旅行みたいな話になってしまうのですが、ジュネーブに参りますと「宗教改革公園」というのがあります。ジュネーブはご承知のように宗教改革の本拠地で、その公園にカルヴァン、ベザなどいわゆる改革派の宗教改革のお歴々の像が立っています。その一番右端だったと思いますが、そこにはオリバー・クロムウェルの像もあるのですが、ロージャー・ウィリアムズが立っているのです。これには本当に驚きました。なぜかというと、カルヴィニストの中にこのような存在が加えられているということは驚きだからです。あれはだれがどういう意味をこめて建てたのかは分かりませんが、東京神学大学の学長室にはその写真がありまして、不思議に思いながら見ていました。

その後ヴェーバーなどによってこういう存在が重要視されてくるようになったのではないかと思います。ところでマ

ックス・ヴェーバー自身がイェリネックの思い出をこういうふうに語っています。これは有名なマリアンネ・ヴェーバーの『マックス・ヴェーバー』の中の言葉です。

「しかしまさにこのわたしには、総じて運命がやり遂げさせてくれるものへの最も決定的な刺激を彼の偉大な労作からどれだけ受けているかに言及することが恐らく許されるでしょう。個別的な幾つかの例を挙げることにとどめますが、方法論的諸問題については『主観的公法の体系』の自然主義的思考と独断的思考の区別、社会学というものの漠然とした課題の明確化のためには『社会的国家理論』の概念の創出、人々が最初宗教的なものがあるとは思わないでいるような領域での宗教的なものの影響範囲の研究のためには『人権』の発生に関与する宗教的要素の検出がそれです」(大久保訳　三六〇ページ)。

このイェリネックの論文を指して言っているわけです。

イェリネックは、トレルチにこの分野のさらに詳細な研究を期待しました。トレルチは『近代世界の成立に対するプロテスタンティズムの意義』の中でイェリネックの見方を裏付けています。イェリネック、ヴェーバー、トレルチは、ハイデルベルクの同僚であり、イェリネックが年長の教授であった時、若手で盛んに活躍しだす二人の教授、これがヴェーバーとトレルチでした。

### (2)ペリー・ミラー

さて、アメリカ側でこのロージャー・ウィリアムズという名前が、いわゆる教派的な枠から取り出されてもっと広い

視野のもとで見直されるようになったきっかけは、ペリー・ミラーの『ロージャー・ウィリアムズ』(*Roger Williams, His Contribution to the American Tradition*) という本です。ペリー・ミラーは英文学関係の法はよくご存じの名前ですが、これはピューリタン研究家の間でも重要な名前です。その後に *The Complete Writings of Roger Williams* という七巻本が出ますが、これもペリー・ミラーが主となった企画です。

ペリー・ミラーが出しましたこの『ロージャー・ウィリアムズ』という本は、何と第二次大戦後のものです。一九五三年に出まして、それがペーパーバックで出るようになりました。これが一九六二年です。私はピューリタンの契約神学を研究していまして、学位論文を書き上げたのは六〇年ですから、その後のことです。もちろん、ロード・アイランドのプロヴィデンスにあるブラウン大学というのは、そのロージャー・ウィリアムズの伝統を残すところですから、そういうところにはいろいろな研究がありバプテスト史研究の中でとりあげられるということもあったでしょうが、ペリー・ミラーがいわば教授の枠を破って公の舞台にロージャー・ウィリアムズを紹介したと言うことができると思います。ロージャー・ウィリアムズの英語はわれわれ外国人にはとても容易に読解できるものではありません。私はこのペリー・ミラーに全面的依存していますので、テキスト・クリティシズムをやって議論をするというような、そういう専門的な研究はとてもできないわけです。二次的な、つまりペリー・ミラーの手引きに従ってといいますか、そういうところがあるのですが、そういう仕方でこのペリー・ミラーにお世話になってきたわけです。

ペリー・ミラーはこの本を書いた後に、この『ロージャー・ウィリアムズ全集』の第七巻に 'Roger Williams. An Essay in Interpretation' という論文を書いています。非常に面白いものです。そのなかから引用します。

He did not conceive the prohibition of a state church to be a negative device, but as a positive gesture, strengthening human reason with the immeasurable grace of God. He was not a humanitarian outraged by the cruelties of fanaticism, but a 'Seeker' after an unattainable perfection. He would build a wall of separation between state and church not to prevent the state from becoming an instrument of 'priestcraft' but in order to keep the holy and pure religion of Jesus Christ from contamination by the slightest taint of earthly support.

(p. 6)

これでご覧頂きますと、まず state church という体制を否定するということは、決してネガティブな、消極的なものでないということです。そういうことをここではっきりさせているわけです。そこで、'He was not a humanitarian outraged by the cruelties of fanaticism, but a 'Seeker' after an unattainable perfection.' これは彼の思想の基本を言い表していると思います。宗教的な寛容というのは、たとえばパネンベルクは三十年戦争で宗教戦争はこりごりだという思いからトレレーションが出てきたという解釈をするのですが、そうでないのです。これがペリー・ミラーの解釈です。それは、いわゆる 'humanitarian' ではなくて彼は、'Seeker' ということを重視します。これは非常に重要な、宗教的な態度を表す概念になります。こういうことから彼は教会と国家の分離論を主張するようになるということです。

ウィリアム・ハーラー、これはこの前も引用した（「デモクラシーとピューリタニズム」『聖学院大学総合研究所紀要』第3号所収）コロンビア大学のバーナード・カレッジの英文学の先生でしたが、この人もペリー・ミラーと同時代

で、アメリカにおけるピューリタニズムの意味を再発見したもう一人の人です。この人は、私が留学していたのはユニオン神学大学ですが、そこにマカルペン・コレクションというのがあって、それを完璧なまでに読破しそれを使った研究家です。彼は二冊のピューリタン研究の本を書き、その後の方が *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution*、出版は一九五五年です。この書物のテーゼは「リフォメーションからトレレーションへ」というものです。このなかでウィリアム・ハーラーはこういうふうに言っています。

Toleration was not a solution of that problem but merely a way of evading for a time the difficulties arising from failure to find a solution. (p. 355)

これはちょっとネガティブな感じを与えます。トレレーションというのはそういう意味ではネガティブな体制だとハーラーは言うのですが、同時代で恐らくこれを知ってでしょうか、ペリー・ミラーはそうではない、もっとこれは積極的な宗教的な意味を持つものだという主張をしたわけです。

こういうアメリカ側の発見というものは、何と第二次大戦後であるということを考えますと、イェリネックが二十世記初頭にロージャー・ウィリアムズに注目したというのは、本当は私は偉大なことだと思います。マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムのセクトと資本主義の精神」、ご存じの方がおられると思いますが、アメリカのプロテスタンティズム諸教派、セクトの問題を取り扱った論文です。この論文はアメリカ旅行の記録みたいなものですが、そこでヴェーバーが興味をもったのもロージャー・ウィリアムズです。ヴェーバーは、separation of charch and state これがどうしてアメリカという社会で起こるのか、それに関心があったわけですが、それはイェリネックからきた関心事

だと言うことができると思います。

## 二　ロージャー・ウィリアムズの思想の要点

### (1)良心の自由

それでは、ロージャー・ウィリアムズはどういう思想を持っていたのか。大まかにしか申し上げることはできませんが、その中心に「良心の自由」という概念があります。コンシエンス、ラテン語のコンスキエンチェアという概念は宗教改革以来とくに重要な意味をもって登場してまいりますが、この「良心」というのは、いわば神と人間との関係点です。現在の神学者は、コンシエンスの「コン」というのは、バルトはゲヴィッセンとドイツ語で言うよりはミットヴィッセンだと言いましたが、神と共に知るという意味を含んでいます。そういうようなことが可能になるような意味で、神と人間、その関係点を成しているわけです

宗教改革以来、人間の良心が大変に強調されだしてくるというのが一つ注目すべき事実だろうと思います。カール・ホルというルター研究家の論文から引用しますと、ルターの宗教は'Luthers Religion ist Gewissensreligion.'と規定します。これは彼の全集の有名な論文の中にある命題ですが、「良心の宗教」だと言った場合に、単純に申しますと、サクラメント的な宗教ではないということです。中世カトリック教会の宗教というのはサクラメント的な宗教だったので

す。マックス・ヴェーバーが「非魔術化」と言ったのは、実際には「非サクラメント化」といってもいいような性質を持っているわけです。そういうサクラメント的な宗教に対して「良心」と言った場合には、人格性、persönlichkeit、あるいは verantwortlichkeit、responsibility、これが人間の宗教の性格であり、人間の側の神との関係点をつくるようになるわけです。そういう意味で、倫理性が強調されるということをカール・ホルはいっています。

良心＝人格性＝責任性。このことが宗教改革によって強調されたことを受け継ぐことなしにピューリタン的な良心の自由ということはあり得ないのです。そういう仕方でこの宗教は、神と人間との直接的な関係を表すものとなってきました。宗教におけるサクラメンタリズムからパーソナリズムへの転化。信仰の内面化。内面化すなわち良心宗教なっていくのであって、外面的な慣習、習俗としての宗教ではないのです。内面化されますから、いわばポータブルになるのです。どこにでも持っていけるわけです。外面化された宗教というのは持っていけないのです。日本の神道などは外に持っていけませんから、外国に行くと神道的共同体から離れて非常にセキュラライズしてしまうということがあるのですが、ピューリタン的な内面的良心宗教というのは、「ポータブル」というのはちょっと言葉が悪いのですが、メイフラワー号に乗ってアメリカまで持っていけるようになるわけです。そういう意味での内面化が起こってきます。

この「良心」というものがピューリタン運動の中で大変強調されてきます。そして、ウィリアムズの書いたものの中にしばしば出てくる言葉に "the cause of conscience" と言う言葉があります。「良心の大義」と訳しましたが、もっといい訳があるかもしれません。ウィリアムズは信仰と真の確信がなければすべて罪である。しかし、神的霊的な事柄においては、最も貧しい農夫といえども最も高い君主の助けを受けるのをいさぎよしとしない、と主張します。「信仰と

真の確信がなければ」(without faith and true persuasion)、このpersuasionというのも、大変に独特なピューリタン的概念です。心の中に確信を持つ、そういうようなものが宗教になるわけです。こういう仕方で人間の内面性が大変に強化されるということが必然的に出てきます。「信仰とか内面的な確信のないものはすべて罪だ」と、これは聖書の言葉を用いているのですが、そういう意味で、「しかし、神的霊的な事柄においては、最も貧しい農夫といえども最も高い君主の助けを受けるのをいさぎよしとしないのである」という内面性の確立、主体性の確立というものが発生してくるわけです。

永岡先生が訳されましたリンゼイの『民主主義の本質』の中に出てきますが、レインバラというクロムウェルの軍隊の一人の軍人が、イギリスの最も貧しいものも生きるべき命を持っている、と言ったのはウィリアムズの「良心」の主張と同じですが、ここでご注意頂きたいことは、ロージャー・ウィリアムズはレインバラなどよりも前だということです。既にこういう考え方がでていたわけです。

しかし問題は、こういう良心の自由ということ、良心宗教と言われることがいかなる変化をつくり出すかという問題です。リード先生といつぞや話をしていた時に、こういうセパレーション・オブ・チャーチ・アンド・ステイトという日本国憲法の中に入ってきた教会と国家の分離のもとで、その分離における宗教概念というのは、神道の人から言うと、それは全然受け入れられないものだという意味のことをおっしゃいました。これは元来、セパレーション・オブ・チャーチ・アンド・ステイトという体制の中での宗教というのはピューリタン的な宗教概念だからであります。だからピューリタン的に生きなければならない宗教になってしまうのです。盛んに宗教的な活動をして、信徒が集まってきて、そ

して経済的にも自立できるという形を取らなければならないのです。そういう意味で、この憲法の宗教概念はわれわれにとって異質だというふうに考える人々がいるのは当然だと思います。こういう歴史の背景があるわけです。

### (2)権利としての信仰の自由

もうひとつの問題は、こういう良心の自由というものが、いかにして「権利」としての信仰の自由になるのかということです。そこで、まずウィリアムズから引用します。

「よく試して〔この信仰を〕得たのだから、一つの王冠を犠牲にしても、われわれはしっかり守らなければならない。現在の様々な試練といった些細なことのために、それを手放してはならない。高価な真理を手に入れたのだから、それを安価に売り払ってはならない。全世界のためだからとか、われわれ自身が最も大切と思う多くの魂の救いのためだからとしても、そのごく一片すら売り渡してはならない」(Miller, *Williams*, p. 111)。

「自分の魂の中に持っている自由というものは、外的な必要とか外的な圧迫によって、その自由を他に渡してはならない」。ここに信仰を権利としてとらえるという考え方が出てきます。

これと同じ考え方が、ミルトンの中にもあります。*Difensio Prima* という本です。チャールズ一世を断頭台で処刑したことがヨーロッパ中のごうごうたる非難になってきたことに対して、イギリス国民のために弁明書をジョン・ミルトンが書きます。なぜかと言うと、このジョン・ミルトンはクロムウェルの共和政府のラテン語秘書官、いわばスポークスマンなのです。これは彼が書いた有名な言葉でありますから、ラテン語でその有名なところを、さわりだけですけ

れども引用しておきます。

Libertas nostra non Caesasris, verum ab ipso Deo natale nobis donum est ; eam Caesasri cuivis reddere, quam ab eo non accepimus, turpissimum esset, et humana origine indignissimum. (*The Works of John Milton*, Columbia University Edition. Vo 1. 7)

「われわれの自由というのはカイザルのものではない。神が誕生の時にわれわれに与えた賜物だ」というのです。だから、こういう自由というものは、これは「カイザルのものはカイザルに、神のものは神のものに」という、あの聖書の言葉を引用して言っているのです。われわれの自由というのは神からの生得権のような仕方で与えられたものだ。「バース・ライト」という言葉ですけれども、生得権として与えられたものだから、これをカイザルに渡すことはできない。神が要求するならばそれは仕方がない。しかし、神のものだからカイザルに渡すことはできない。これが「自由」という主体概念を客体化する、客体的な権利、権利化するロジックになってきます。

これは宗教改革者においてははっきりしなかったところです。宗教改革者マルチン・ルターの有名な『キリスト者の自由』というのを見ますと、キリスト者はすべてのものの上に立つ君主みたいだという強調は確かにあります。しかし同時にこれはすべてのものに対する奴隷だということでもあります。この間がないわけです。中間の次元といいますか、権利としてそれを守るということを宗教改革者は考えませんでした。あるいは、たしかに事実ヴォルムスでは信仰を守った。しかしそれを明確にする論理がなかったと言うべきかも知れません。それがこういう仕方で権利として守る、この自由を守るという考え方が出てきたのであります。

## (3)セパラティズムと教会と国家の分離

「セパラティズム」という言葉ですが、これもまた歴史的な概念です。セパラティストと呼ばれるグループがピューリタン運動の中に発生しました。エリザベス一世の時です。

ピューリタニズムは、中世以来伝わってきた教会と国家が一つになっている体制、それはコンスタンティヌス体制といわれるように、本当にヨーロッパでは古い体制で、クリステンダムと呼ばれ、あるいは、コルプス・クリスチアヌムと言うこともありますが、教会と国会が楯の両面のような形である体制でした。それをリフォームする、それがリフォーメーション（宗教改革）であります。リフォームするというのは形を変えることですが、どういうふうにして変えるか。それは聖書的なフォームに従ってリフォームするという意味です。しかしこの中世的体制に対してイングランド全体のリフォームというのは大変な改革とならざるを得ません。実際には、牧師は説教によって改革するということになるのですが、説教で変えられるわけがないのです。そうすると政治的な権力を用いて変えざるを得ません。問題は、エリザベスがピューリタンの願いを受け入れないで、改革をしてくれなかったらどうなるかという問題です。エリザベスはカトリックとプロテスタントの中間を行くアングリカニズムを再建しました。それに対するピューリタニズムとなってきます。このピューリタニズムは、基本的には、何とかしてエリザベスを動かして、神の言葉に従ったリフォーメーションをやりたいというふうに考えていたのですが、実際にはそれは進展しません。その時にどういう問題が出てきたかと言いますと、ピューリタンは、エリザベスのユニフォーミティ体制のフォームにコンフォームしないという生き方、

それがノンコンフォーミストとなるのであります。

このノンコンフォーミストとは、実際には、時至らばリフォームしたいわけです。あるいは地下に潜ってでもしばらく時を待つ、外国に行ってでもしばらく時を待って、エドワード六世というのはメアリーの前ですが、そういうようなプロテスタントの信仰を理解できるような君主が立ったらリフォームが実現するという考えです。ところが、エリザベスは全然そういうことをしてくれない。しかも四〇年の長い統治となります。それでピューリタンは非常に困ります。その中でノンコンフォーミストの生き方に亀裂が起こります。それは、大体そういう政治的な権力を持って、それに頼って宗教改革をやろうとするからいつまでもできないのだ、政治的なるものと関係なく教会の新しい生き方がつくれるはずだという生き方になります。そうすると教会というのは今までのようなコルプス・クリスチアヌムの楯の両面のような体制ではなくて、国家からセパレートしてきます。これがセパラティストという意味です。

こういう動きがエリザベス時代に出てきて、ロバート・ブラウンがその指導者であったのでブラウニストと呼ばれるのですが、これがセパラティストと呼ばれるものになってきます。そしてこのセパラティストの生き方をエリザベスの時代から次の時代に非常に明確に主張するようになるのが、ロージャー・ウィリアムズです。

メイフラワーの人たちはセパラティストでした。しかし、その後、一六三〇年のマサチューセッツベイ、ボストンにやってきた人たちは、セパラティストではないのです。一六三〇年というのは、革命が始まるのは四二年ですから、その一二年前のことです。そこに来た人はセパラティストでないのです。だから妙なことなのですが、あのニューイングランド、ボストン周辺では、コングリゲーショナリズムによるエスタブリッシュメントを考えるのです。それとぶつか

るのがロージャー・ウィリアムズでした。

それで、私はこのセパラティズムの「セパレーション」が、セパレーション・オヴ・チャーチ・アンド・ステイトの「セパレーション」だ、歴史的にいうとそういうものだということを言ってまいりました。

このような経過の中で、実際にはピューリタン革命がおこり、その革命を機会としてもう一度、リフォーメーションが企てられます。それが一六四二年から四七年にかけて行われたウェストミンスター・アセンブリーというものです。マックス・ヴェーバーは大変ウェストミンスター・コンフェッション・オヴ・フェイスというものを重視するのですけど、ちょっと見当が違っていると思うのです。あれはプレスビテリアンの考え方です。わたしはこのウェストミンスター・アセンブリーで企てたこと、それはアングリカニズムに代えてスコットランドとイングランドは同じプレスビテリアニズムというディシプリンでゆく、このディシプリンというのがフォーム、リフォームのフォームです。だからヴェーバーは見当が違っていると思うのです。

聖書の中にはっきりしたディシプリンがあるということを、プレスビテリアンもコングリゲーショナルも考えていました。コットン、これはニューイングランドのコングリゲーショナリストですが、彼が言ったこと、「教理と礼拝の根本的で重要な点においては、神の言葉は非常に明快である」、これがプレスビテリアンだけではなくてコングリゲーショナリストも同じ確信を持っていたということを知らなければならないのです。ただ、その非常に明快であるというとらえ方、明快の内容が違っているわけです。

こういう仕方でリフォーメーションということを企てた人々は、革命を通して権力を確保してリフォーメーションを

遂行しようと考えるのですが、それは歴史的なアイロニーで、プレスビテリアンは実際にはリーダーシップを失ってきます。そしてクロムウェルの軍隊が主導権を握ります。クロムウェルというのは、一般には独裁家とかいろいろありますが、思想的には非常にトレレーションに興味をもった指導者です。ロージャー・ウィリアムズはクロムウェルとも親しい関係をもっていました。その辺は全部省略をします。

プレスビテリアンからコングリゲーショナルまで、ピューリタンはそういう仕方でリフォーメーションを考えているのに、ウィリアムズはそういうものにも徹底的に反対します。「エスタブリッシュメント」という言葉はアメリカ合衆国憲法修正第一条の有名な言葉ですが、これはエスタブリッシュト・チャーチの意味ですから、国教会制度です。ウィリアムズは、そういうものは新約聖書の中にはないのだと言うのです。

そういう意味で、このロージャー・ウィリアムズは反エスタブリッシュメントの代表者になります。反エスタブリッシュメントというのは、ヨーロッパの歴史から見ますと、何と言っても新しい社会理念であり、新しい教会理念であり、新しい社会制度です。ですから「近代」ということを考えるときに、理念だけではなく、こういう制度でもって考えなければなりません。近代化とは反エスタブリッシュメントが制度化していくプロセスです。これはたしかに合衆国憲法修正第一条まで待たなければできませんでした。アメリカはそのころまで、これは相当の州でエスタブリッシュメントをやっていたのです。これは驚くべきことです。

ウィリアムズは新約聖書の基礎に立って反エスタブリッシュメントを強調するわけですが、教会の形はどちらかと言うと、コングリゲーション型です。プレスビテリアンのタイプではなくなるのです。バプテストも似たところがありま

す。そういうのが打ち出されていく中で、ピューリタン運動の中で教派的に分解してしまった結果、どうしてもリフォーメーションができなくなるのです。だから、状況的にもこのアン・エスタブリッシュメントでいかざるを得ない。これがジョン・ロックに出てくるわけです。教会と国家の分離という形ではっきりと出てきます。

英国のこの時代を考えるために、面白い点があるのでふれておきます。このリフォメーションの「フォーム」は聖書から取り出すことができると、プレスビテリアンもコングリゲーショナルも考えていました。実際その当時ピューリタンは、あらゆることは聖書の中にフォームがあると考えましたから、礼拝の様式まで聖書には明快に示されたフォームがあると考えたのです。どういうふうに考えたかというと、アイグリカンのような白いサープリスを着て礼拝に行くということは聖書に書いてない、だからそれは反対だと言うわけです。しかし、アングリカンの方は、すべて書いてあるというけれども書いてない事だったらそれは別に定めればよいではないか、祭帽をかぶっていいのかいけないのか、どういう礼拝様式を取るかというのが書いてないではないか、そういうものは書いてないものとして、「アディアフォラ」（無規定の事柄）という言葉で言うようになります。これがジョン・ロックの初期の論文に出てくるアディアフォラをめぐる議論です。この問題にぶつかったときに、アングリカンの考えたことは、聖書に書いてないことは多々あるのだから、そういうのは政治的権威者が決めるのに従えばいいではないか、こういう説が出てきます。これがアングリカンの立場になります。だから、サープリスを着て礼拝に来るというのがユニフォームの形であると政府が決めるのに従えということになる。だからアングリカンは、エリザベス女王が決めることに従ったらいいではないかという考えになります。

ところが、それに対して、アディアフォラというものを国家権力によって決めるのではない。しかも聖書によってはっきりしたフォームが規定されていないとするならばどうしたらいいかというところで、理性的にどう考えてやるのが一番いいかという議論が出てきます。私はここにイギリス独特なモーラル・フィロソフィーの淵源があるのではないかと思うのです。アイディアフォラだから一生懸命に考えてやらなければならないのです。こういうことがイギリスでは大きな課題になってきました。

しかし、そういうような状況を肯定する思想がなければ、その状態を容認することはできないはずであって、ウィリアムズが打ち出した線というものがその方向を示しています。そういう方向にウィリアムズから修正第一条への道というものがあるのではないかということになるわけです。

## 三　トレレーションの思想構造

### (1)聖書と聖書解釈

それでは、どういう思想的な根拠があるのかということですが、それがトレレーションの思想ということで、ここでは要点だけを申し上げます。ペリー・ミラーはウィリアムズの独特な聖書解釈を、その思想的な理由として挙げます。それは「タイポロジー」というのです。ただ、このタイポロジーという理解の仕方が、ペリー・ミラーはやはり英文学

の先生であって、それを求めるのが無理ですけれども、神学の議論としては問題があると言わざるを得ません。タイポロジーというのは、聖書解釈の長い伝統のある考え方です。しかし、ペリー・ミラーはそれとピューリタンのカベナント・セオロジー（契約神学）とを対比させました。私はこれは無理な対比だと思っています。

旧約と新約のとらえ方もヴァリエーションがいろいろ出てきます。例えば、カルヴァンは幼児洗礼を擁護しました。それはなぜかというと、旧約における幼児洗礼のタイプは割礼です。ユダヤ人は割礼を受けます。そして教会は、新しい新約聖書におけるイスラエルだから割礼のアンティタイプとしての幼児洗礼を受けるのだという議論を立てたのです。そういう仕方で古いイスラエルに対する新しいイスラエル（教会）はナショナルチャーチでなければならないと考えました。それはやはり伝統的なエスタブリシュメントの形です。このようにタイポロジーをウィリアムズ独特と言うことはできないし、またそれをピューリタンの契約神学と対置することもできません。ペリー・ミラーは同じタイポロジーをちょっと違う仕方でとらえたのですが、その違いだけだろうと私は思います。

どういうのかと言うと、それはタイプとアンティタイプの間を非常にむしろするどく切る立場です。新約聖書においては全く新しい時代が始まるわけです。だから教会は古いイスラエルのようなものを受け継いでいるのではなく、全く新しい霊的なエクレーシアというものであるということになります。そのことによってユダヤ人もインディアンもみんな同じになる、これが彼の独特な思想です。

もしも新しいイスラエルという考え方をいろいろな仕方で使いますと、ヨーロッパのキリスト教国民、あるいはキリスト教的なプリンス、これはあのダビデの系統になってしまうのです。だから、そういうキリスト教的なプリンスがい

るならば、教会の体制にある影響を与えていいのではないか、こういうふうになるわけです。これをカルヴィニズムも同じように考えました。これがカルヴァンの考えた「神の言葉に従って為政者は宗教改革をやる」ということです。

ところが、このウィリアムズは旧約と新約との間をむしろ非常に断絶させますから、ちょうどキリストが復活して天に昇るという、そういう新しい時代が起こったとき、古いものは全部、その出来事から見るとユダヤ人もギリシア人もインディアンも東洋人もみんな等距離になるとするわけです。特別の意味を持たなくなってくるのです。それが非常に面白く出ているのが「Christening」です。クリスニングというのはクリステンダムのメンバーになることです。「幼児洗礼」の意味です。それが名詞になるとクリスチャンです。ウィリアムズは、それを否定したのであります。

### (2)中間時と Seeker

その次の問題は、「終末論」とか「中間時」という言葉で考えられている事柄であります。中間時ということをもうしますなら、再臨を右端に置き、キリストの時代を左に置くと、その間の時代を意味します。これを近ごろ「中間時」という言い方をしますので、これを借りますと、われわれの生きているのは今「中間時」という時代に生きていることになります。再臨がまだ来ないという状況で生きているのだというのです。この再臨において何が起こるかというと、あらゆる矛盾、あらゆる分裂がここでは克服された状態の実現です。これをトーマス・モアの作ったユートピアという意味で言ってはいけないのですが、歴史の中にあるあらゆる矛盾、対立というものが克服される日が将来やってくるというのです。これが、もしも今ここにやってくるとすれば、これは神的なるものが歴史の中にあるということになりま

す。そうすると、ここに何が起こるかというと、歴史の中に永遠をもち込む、自己絶対化というのが起こります。これがロージャー・ウィリアムズが非常に嫌いであったわけです。ロージャー・ウィリアムズの言葉ではないのですが、ペリー・ミラーはこう言います。

> whether be a wrong interpretation of the covenant（これはマサチューセッツのオーソドクスの解釈を言います）or the promting of an impulse called the inward light（これはクェーカーを言います。そういう両方は、結局は）into self-rightousness.（に行くのだと言います）。（*Roger Williams*, p. 244）

これがいけないと言うのです。再臨が今起こるという考え方を、神学で「realized eschatology」という言葉で言います。realized eschatology というのは、何かこの中間的な矛盾が克服された状態が歴史の中にもあるというのです。そうすると、そこでは矛盾やあいまいさがなくなり非常にはっきりしたことが分かるようになります。それはどういう状態で起こるか、もしも聖書の中に明白なフォームがあるのだと言うと、それもはっきりするわけです。

他方、クェーカーは、今度は'Letter and Spirit'、これもその当時では非常に重要な対概念ですが、この Letter というのは、言うまでもなく聖書の文字です。Spirit は、聖書に対する霊感ですから、神の霊です。その「文字と霊」との間の緊張関係をどういうふうにとらえるかです。Spirit というのはとらえにくいわけですから、これを文字と結びつけると非常にはっきりするわけです。フォームがはっきりするというのはそういうことです。プレスビテリアンもコングリゲーショナルもそれを主張しました。ところが、これを分けてしまうと、Spirit だけになると、Letter による限定を失いますから、これもまた自己絶対化になります。これがクェーカーに対するウィリアムズの最後の闘いになります。

ニューイングランド・ピューリタン正統派は Letter つまり聖書ははっきりしているというふうにとらえます。そうすると、宗教改革はこれだとはっきり言えるわけです。ところが、クェーカーはそれを分けてしまうのです。ウィリアムズはその間のテンションの中に立っているのです。だから非常にウィリアムズは分かりにくいというわけです。しかしこのテンションを理解しないとトレレーションというものの味が分からないのではないかと私は思っています。これは本当に大切なところだろうと思っています。そのためにはこの中間時ということが分からねばならない、その中間時を表現するいろいろなものがあるのですが、それだけをご紹介して終りたいと思います。

ウィリアムズは、コットン、これは先程でましたが（教理と礼拝の根本的な重要な点においては、神の言葉は非常に明快であると言った人）、教理と礼拝が根本的に重要であることは聖書に非常にはっきりでているのだと言ったことに対して、「真理と平和の対話」という仕方で反論を書くのです。真理と平和とか正義と平和の接吻、そういう美しい調和というのは歴史の中にないと言うのです。

「それは来るべき天上にある。これらは天と地とは古びたものとなり、上着のように替えられるであろう。それらは消え去り、地とその上につくり出されたものすべては焼き尽くされるであろう。そして至高にして永遠なる創造主は、義の住む新しい天と新しい地を栄光をもって創造したもう。そこではわれわれの接吻は清純にして美しき喜びを永遠に保つであろう。その時までは、あなたも私も希望を持って待ち、龍〔これは黙示録に出てくるのですが〕の怒りの凶暴に耐えなければならない。その時、龍は恐ろしい命と凶暴さと共に第二の火の池に投げ込まれるだろう」。

これは終末論的な言葉で言っているわけですが、そういう状態が地上の状態だと言うわけです。だから、こういう中間時においては、終りの日の調和のようなものはないというのです。

同じ有名な言葉は、ミルトンの『アレオパジティカ』の中に出てきます。それを読んでみますと、

「真理は一度その聖なる主と共に現世に来たことがあり、最も光り輝く完全な姿であった。〔というのは、この状態で一度来たことがあるという意味です。〕しかし、主が昇天し、その後を追って使徒たちが主の眠りにつくや〔ここで文学者ですから文学的な言い方をしますが〕邪悪な詐欺師の群れが起ったのである。彼らはエジプトのテュポンが共謀者と共に善良なオシリスを殺した物語のように、処女である真理を捕まえてその美しい肢体を切り刻み四散させたのであった。その時以来、あえて真理の味方として世に出た人々は悲しみながらも八つ裂きにされたオシリスの肢体一つ一つを探して歩いた故事にならい、真理の手足を一つ一つ見つけては拾い、野を越え山を越えて行ったのである。上下両院議員諸君、〔これは『アレオパジティカ』というのは議会の議員に対して訴えたものだからです〕われわれはまだ全部見つけてはいないのであり、また真理の主が再臨されるまでは全部を見つけることはできないであろう。主だけがあらゆる関節、手足を揃え、美しい完璧な不滅の姿を作るであろう」。

そういう完璧な美しい調和というのは終わりの日に見ることができるのだ、今はここ中間時にいるのだということです。

問題は、トレレーションと言った場合には、基本的にはこの状態に耐える力です。トレレートというのは「耐える」という意味があります。寛容というのではなくて耐えるのです。中間時に耐える力というものをもって、ちょうどミル

トンもそうですけれども、真理というのは結局、ばらばら死体のように、全体がばらばらに風に吹き飛んでいってしまったものを我々がそれを一片一片を集めてきて全体像を作っていくという仕方でしか実現出来ないのです。この中間時に耐える人間は真理探究的にならざるを得ないという考え方です。だから真理の保持者ではない、真理探究的にならざるを得ないということがトレレーションの基本的な思想です。

## 四　トレレーションの神学的基礎

### (1)神学者ニーバーと法学者ケルゼン

そこで、面白いのはニーバーとケルゼンの論争です。ここに法律関係の方もいらっしゃいますが、ケルゼンというのは日本に相当影響を与えました。ニーバーはこのウィリアムズの思想を現代化したようなところがあります。ところが、そのケルゼンは「トレレーションは宗教の本質に合わない。宗教というのは絶対主義的なものだ」と言うのです。だから、このトレレーションというものは、宗教的な熱心から出たトレレーションだということは、ケルゼンにはさっぱり分からなかったのです。それでニーバーが言うこともさっぱり分からないわけです。これがケルゼンの、ニーバーの相対主義神学批判ということです。これについてはこのぐらいにさせて頂きます。

ここではウィリアムズから修正第一条に向かっていく線を見てきました。ただ最終的に、ここにアメリカ人の同僚も

おられるのですが、ジェファソニアン・エンライトメントの角度だけから修正第一条をとらえるのは、どういうものかなという疑問があるわけです。ジェファーソンはエンライトメント、マディソンはカルヴィニストです。反エスタブリッシュメントの思想というものを持ちながら、ジェファーソンもマディソンもアメリカの重要な役職に立つものはクリスチャンでないとならないなどと言います。これは今のキリスト教大学の役職の問題にも関係あるのですが、そういうようなことを言うのです。それはジレンマだというような議論が起こるわけです。それがジレンマではないというロジックはこのロージャー・ウィリアムズが分からないと分からないのではないでしょうか。もう一時間以上過ぎていますから、これで終らせて頂きます。長くなってどうも失礼致しました。

（一九九三年三月十五日）